

大学生の授業出席率の低下はアルバイトに原因があるのか

尾崎 恵美

1. 問題意識

大学生の授業出席率の低下が問題となっている。だが私の友人の多くは大学の授業をつまらないと感じており、そのことを考えれば授業に出席しないのは時間を有効に使いたいと考える大学生の合理的な判断と言えなくもない。それにしても現在の大学生の怠惰ぶりは目に余るものがあるし、批判すべきは大学ではなく学生だと私は考えている。ではその学生の出席意欲に影響を与えているものは何なのか。今回のアンケート調査をもとに次のような仮説を立てた。

2. 仮説

「アルバイト労働時間が多い人ほど、アルバイトのために授業を欠席している」

3. 仮説の検証方法

仮説検証には、以下の質問の回答結果を用いる。

- ①「最近一ヶ月での、アルバイトの総労働時間はおよそ何時間ですか。」
→ (約○時間)
- ②「授業のために決まっていたアルバイトを休んだことがあるか。(当てはまるものに○)」
→ (よくある、時々ある、たまにある、全くない)
- ③「臨時のシフトのためにどうしても出なければならない授業を欠席したことがあるか。(当てはまるものに○)」
→ (よくある、時々ある、たまにある、全くない)
- ④「臨時のシフトのために出ても出なくてもよい授業を欠席したことがあるか。(当てはまるものに○)」
→ (よくある、時々ある、たまにある、全くない)

まずそれぞれの回答結果を集計し、さらに①と②～④をクロス集計する。

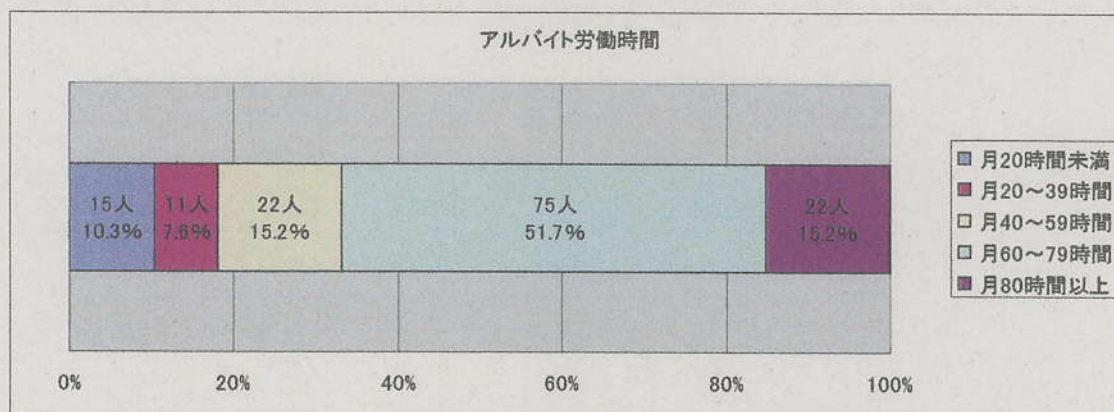
①×②の結果からは、労働時間とアルバイトの欠勤状況の関係が分かる。もし労働時間が多い人ほど「よくある」や「時々ある」という回答が多ければ、労働時間が多い人ほどアルバイトを休む傾向にあることが言える。この検証は仮説と直接関係はないが、アルバイトと学生の関係に労働時間がどのように影響しているかを知ることができる。

①×③と①×④の結果をもって仮説を検証する。もし労働時間が多い人ほど「よくある」や「時々ある」という回答が多ければ、労働時間が多い人ほど授業を休む傾向にあることが言え、仮説の成立を導くことができる。また③と④の回答結果の差から、「出なければならない授業」と「出なくてもいい授業」の欠席経験の差が、どの程度労働時間との関係に表れてくるのかも注目すべきである。

4. 仮説の検証

アンケート回答者190人のうち、最近1ヵ月の間にアルバイトを「した」と回答したのは153人、「していない」と回答したのは37人であった。このうち「した」と回答した153人に対し、「最近一ヶ月でのアルバイトの総労働時間はおよそ何時間か」を尋ねた結果、下のグラフが得られた。

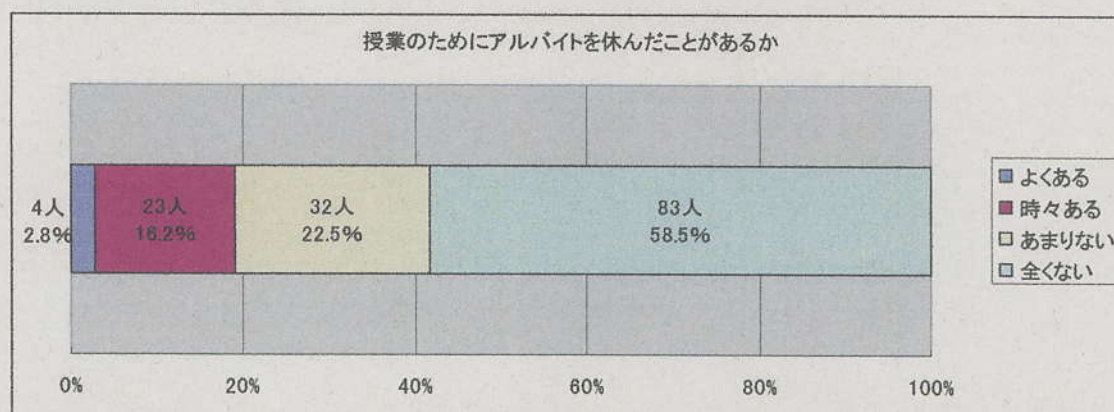
【図1】①「最近一ヶ月でのアルバイトの総労働時間」



もっとも多い回答は「月60～79時間」(75人、51.7%)、つづいて「月20～39時間」と「月80時間以上」(22人、15.2%)、「月20時間未満」(15人、10.3%)、「20～39時間」(11人、7.6%)となった。私自身、月64時間(週16時間、週4日)程度アルバイトをしており、これは結果内容から平均程度の労働時間だと言えるのだが、この労働時間は多くも少なくもなく、自分の時間も適度に持て、体力的にもきつくなく、また経済的にも程よいと感じている。そのため「月60～79時間」が最も多いという結果は予想通りだった。

次に、最近1ヵ月の間にアルバイトを「した」と回答した153人に対し「授業のために決まっていたアルバイトを休んだことがあるか」という質問に、「よくある」、「時々ある」、「たまにある」、「全くない」のいずれかで答えてもらった。

【図2】②「授業のために決まっていたアルバイトを休んだことがあるか」



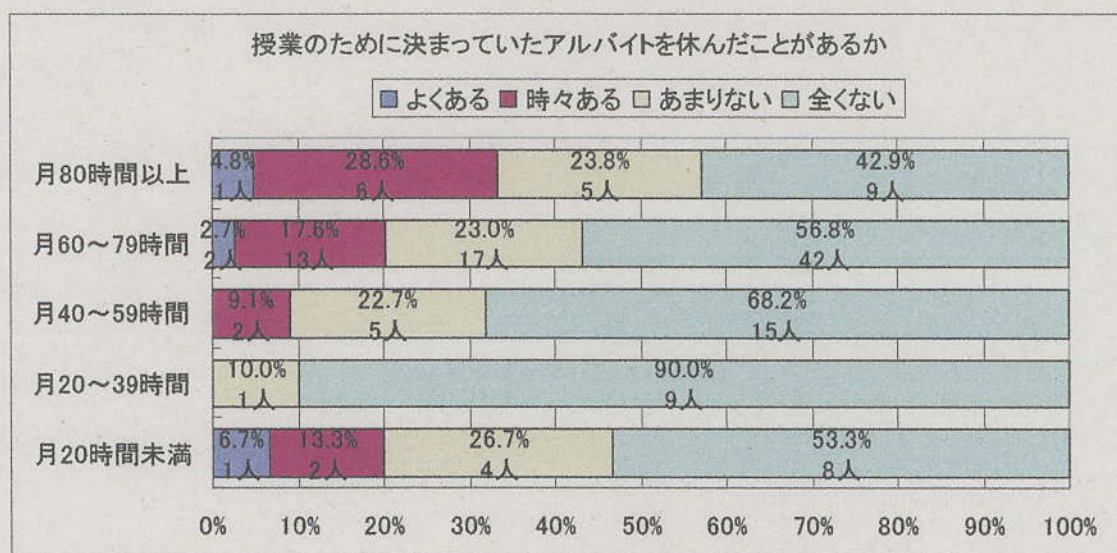
この質問はアルバイトの欠勤経験を聞いているため仮説とは直接関係がなく、授業の欠席状況を測ることはできない。授業のために決まっていたアルバイトを休んだことが「よくあ

る」人は、アルバイトよりも授業を優先する真面目な学生と解釈することもできるが、スケジュール管理が下手な人という解釈も可能である。「全くない」・「あまりない」人たちについても、授業よりもアルバイトを優先する学生と解釈することもできるが、アルバイトの予定を授業に差し支えない土・日や夜間に入れるなど、もともと授業優先のスケジュール管理をしている人と解釈することも可能だからである。授業の欠席状況と直接関係はないが、このグラフから本学の学生の特徴がつかめる。

○授業を理由にアルバイトを休む人は少ない

さらに【図2】のグラフを労働時間別に見ると、次のようになる。

【図3】①×②



月20時間以上では、労働時間が多い人ほど授業のためにアルバイトを休んでいる傾向にある。先述した通り、②の質問内容から出席意欲との直接の関係は導き出せないが、次のことが言える。

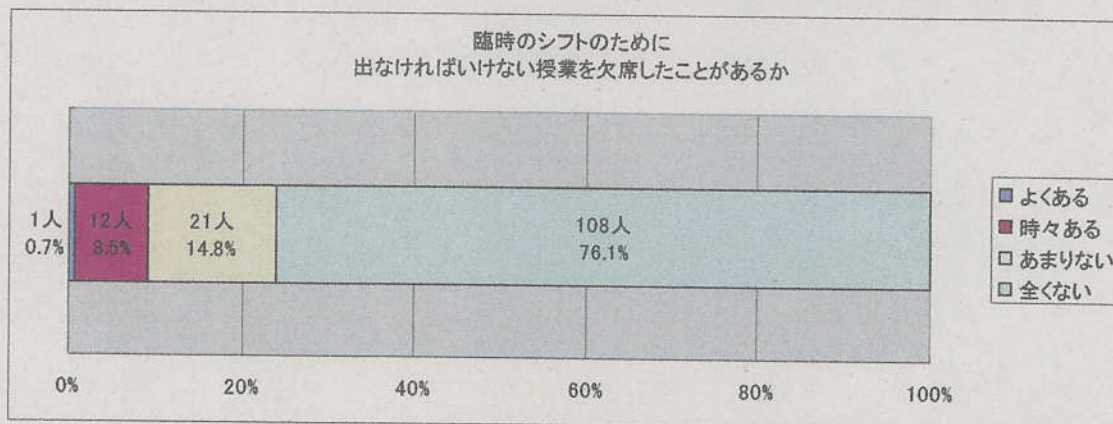
- ・労働時間が多い人ほど授業を理由にアルバイトを休んでいる。

⇒労働時間が多くなるほどスケジュール管理が難しくなり、アルバイトを休む機会が多くなる。

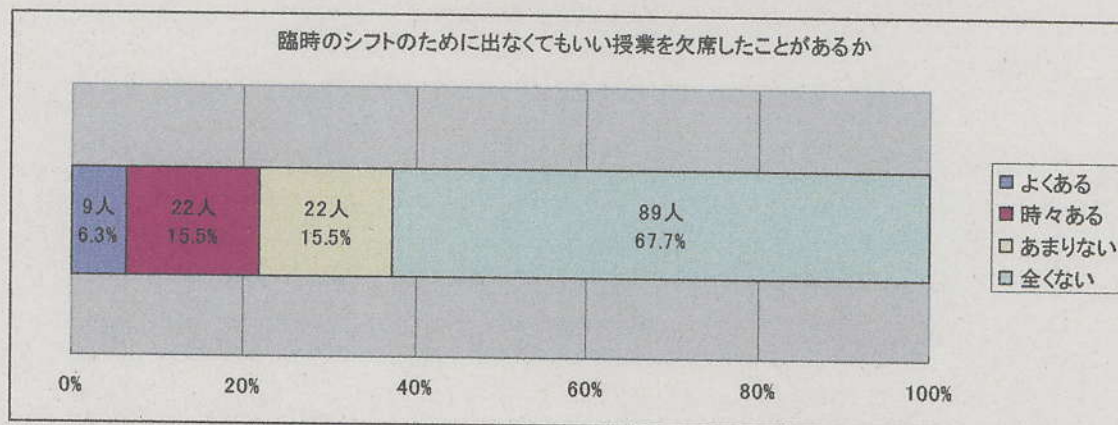
スケジュール管理が上手い学生は多いが、やはり労働時間が多くなるとそれも難しくなるようである。

次に、最近1ヵ月の間にアルバイトを「した」と回答した153人に対し「臨時のシフトのためにどうしても出なければならぬ授業を欠席したことがあるか」、「臨時のシフトのために出ても出なくてもよい授業を欠席したことがあるか」という質問に、「よくある」、「時々ある」、「たまにある」、「全くない」のいずれかで答えてもらった。

【図4】③「臨時のシフトのためにどうしても出なければならぬ授業を欠席したことがあるか」



【図5】④「臨時のシフトのために出ても出なくてもよい授業を欠席したことがあるか」

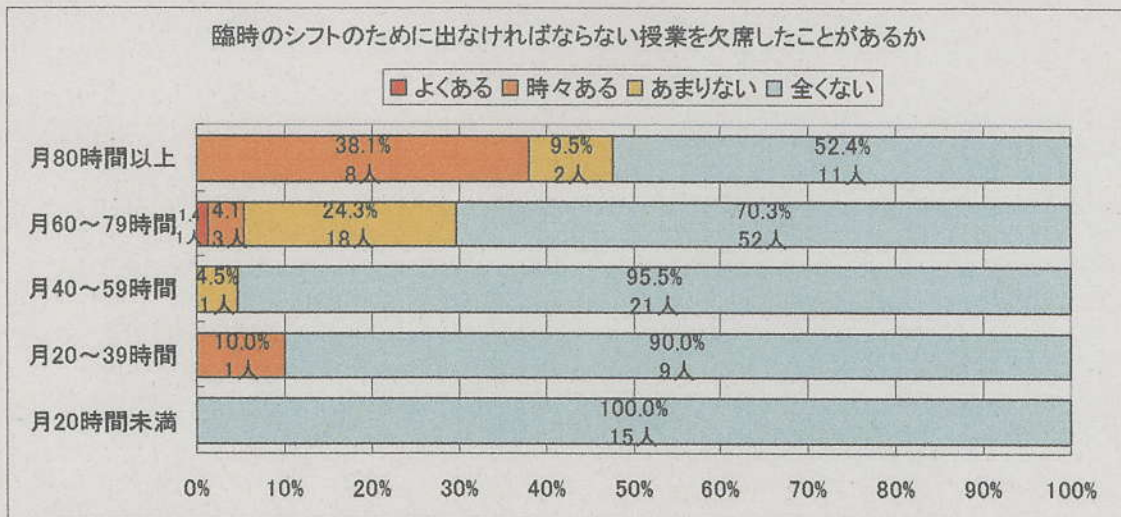


【図3】を見ると「出なければいけない授業」の場合、欠席経験が「全くない」「あまりない」人が約9割、「時々ある」「よくある」人が約1割と、前者が圧倒的に多い。また【図4】の「出なくてもいい授業」に関しても、前者が約8割、後者が約2割となっており、同じことが言える。注目すべきは「出なければいけない授業」と「出なくてもいい授業」との差であるが、両者に大きな差はない。ここから出席意欲の全体的な傾向が読み取れる。

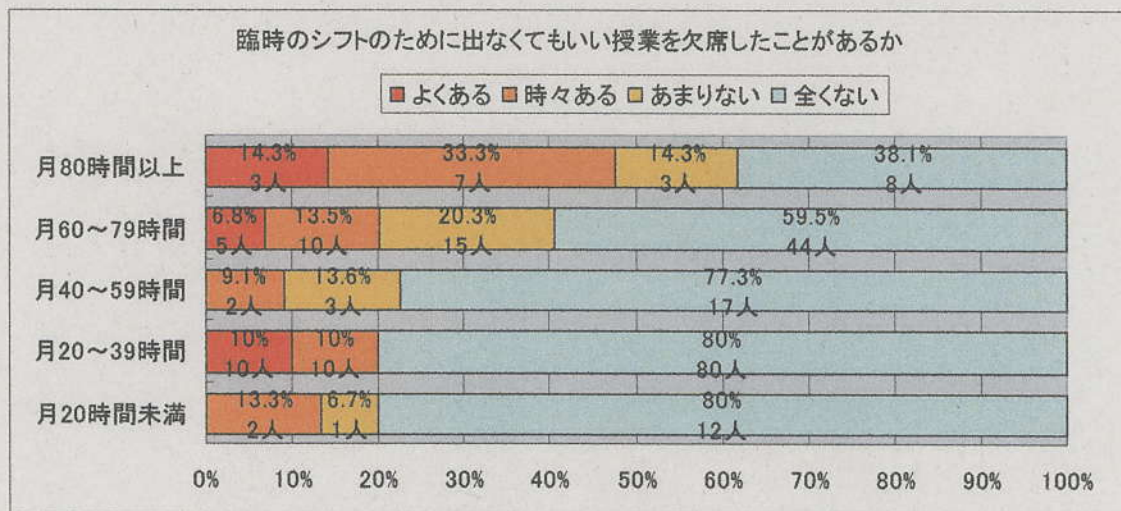
○授業に真面目に出席する学生が多く、出席意欲は高い。

ではスケジュール管理が上手く真面目な学生が多い大阪教育大学で、アルバイト労働時間の多さは授業を欠席する原因となっているのだろうか。

【図6】①×③



【図7】①×④



【図6】【図7】を欠席したことが「ある（オレンジ）」（よくある、時々ある、あまりない）と「ない（水色）」（全くない）のグループに分けると、次のことが言える。

○労働時間が多い人ほど授業の欠席経験が多い⇒仮説の成立

さらに細かく分析すると改善の方向性が見えてきた。【図6】【図7】ともに「ある」の割合が急増しているのは月60時間を越えてからである。また、「月40～59時間」と比べて「月60～79時間」では「時々ある」の増加率が目立ち、「月80時間以上」では「よくある」の増加率が目立つ。欠席経験だけでなく、欠席頻度も労働時間と比例していた。

5. 結論

検証により仮説の成立は証明された。労働時間が多い学生ほど授業の欠席経験が多いという結果が出た。つまり授業出席率低下の問題はアルバイトによる説明が可能であるということだ。もちろん出席率低下の原因はほかにもあり、授業の質や大学制度の改善、受験制度の見直しや、学生の意識改革といった解決策が考えられる。ここにアルバイト労働時間の改善という解決策が加わることで、ますます多様なアプローチからの改善が期待できる。